

第三章 上を向いて歩こう

海底も割れし

淡路東浦町 高田万里（七十一歳）

海底も割れしと聞かざる寒さかな
明暗を分け震災の寒の朝
震災の夜明けの寒さよみがえる
見て過ぎる罹災の街や春祈る
震災の心のいたみ黄水仙
町並みの変りゆくさま冬茜
被災地も光の春となりにけり
街路樹の春の息吹の中を行く
土割りて芽吹く力を見つけたり
冬木立芽吹く気配のあるらしく
薄紅葉完成またる新校舎
黄水仙上棟待たる地震の跡
いかなごを今年も炊ける幸せよ
節分の豆撒く音や被災地に

久々の神戸の街は春の雪
復興の願いをこめて鯉のぼり
雲湧きて初夏の港に汽笛鳴る
虹立つや近況報告和やかに
凜としていま中天の冬の月
石路の黄に庭の明るさ増しにけり

三度の災難

須磨区 佐藤敬子（七十四歳）

第一の天災 水害 昭和十三年

神戸で生まれて、午前中は山登り、午後は海水浴と、兄弟五人で楽しい子供時代でした。

灘区大石駅北、西郷小学校三年生の時、阪神大水害にありました。水の流れの速さは恐ろしかったです。その時姉と私は学校にいました。家では畳が浮いたので、父母弟の三人は、少し高い家へ逃げました。

翌日洗面器を持って並び、おにぎり、梅干、たくわんをもらって食べた時のおいしさは今も忘れません。お正月の着物が水につかって真っ赤に染まったのを見て泣きました。兄二人はどろどろになって帰って来

ました。家族七人無事でした。

母が南の玄関と窓のかぎをしめて逃げたので、北の勝手口の戸がこわれて土砂が天井までたまりました。母は、「今度水害がおきた時は、家の中にも水の通り道をつくり、大切なものは天井裏に上げて逃げる事」と、父は、「台風の際は、風がきついと看板が飛んで来てけがをした人があるので、家から出ない事」と、教えてくれました。

第二の人災 戦争

昭和二十年六月五日の空襲で家が焼けました。焼夷弾のヒュウ、カラカラという音、爆発してけがをした人を見ながら、消防団員から「六甲山まで逃げろ。」と言われ、夢中で走りしました。

空襲警報解除になって、家の焼けあとで、焼けた着物を見て泣きました。田舎に知り合いがなく、配給のものだけで、うすい雑炊といり大豆、豆かす（大豆の油を取ったかす）を分けあつて終戦を迎えました。その時は食べる事ばかりを考えて、好ききらいもなく、一つぶのお米も大切にしました。また焼け出されていない人からいただいた服につきをあてたりして着ました。敗戦でしたので、なんの助成金もない中、両親はどのようにして私達を育ててくれたのか。両親に感謝しています。

第三の天災 地震 平成七年一月

私は一人で寝ていましたら、「ゴウー」という音で何がおきたかわからず庭に飛び出し、桜の木の下に座ったとたん「ガガ」と地面が十センチ位南北にゆれ、「地震」だと思いました。ゆれが止ってから家に

入り、めがね、時計、貴重品などを持って家の前の駐車場に出ました。主人は病気で高橋病院に入院していましたが、毛布をかぶって帰ってきました。

垂水にいる次男が、「東須磨がすごい事になっている。」と聞き、自動車を迎えに来てくれて、垂水区の高丸小学校に避難しました。

避難所でテレビを見ると、長田方面の火事は、空襲の時と同じでした。「パパ」と呼びながら歩いている女の子を見て、空襲の時に泣きもつて歩いている男の子を思い出しました。同じような場面でしたので、空襲の時の男の子も、地震の時の女の子も、親に逢えたのか、今でも心に残っています。

十九日に、ヨーロッパに行っていた長男があわてて帰って来て、奈良から迎えに来てくれました。十九日午後二時頃、垂水を出ました。東へ行く程に、恐ろしくつぶれた家々や傾いたビルなど、ひどいものでした。奈良へついた時は夜中の二時でした。

奈良へ行く時表の戸に、だるまの画にがんばるぞと書いた色紙を張っていたので、それを見た知人たちは私の無事を喜んでくれました。私も、奈良から五十人の弟子に絵手紙を送りましたら返事が続々として、皆無事でよかったです、ほっとしました。

私は、平成六年十二月に胆のうの手術をした翌月、地震にあいましたので、体調をくずし入院しました。奈良では病院の先生をはじめ、たくさんの人に親切にしてくださいだき本当に有難く思いま



した。三月末に退院し、神戸へ帰って来ました。

主人は、家を建てられるか、お金はあるか、と心配しながら十年一月に亡くなりました。それから、こわれた家を少しずつあちらこちらと修理し、やっと十年目を迎えて私の地震の後始末も終わりそうです。

一生懸命、老後のために貯めていたお金が、地震でなくなりましたけど、おかげで家をなおすことができました。主人の両親は金山からの引揚者で、バラックを買って今の地に住みました。私も嫁入りして十年、地震でこわれた家を元通りにしたので、両親も主人も、きつとあの世で喜んでいると思います。

神戸で水害と空襲と地震と三回も災難に遭いましたが、けがもせず助かった命を大切にとがんばりました。

「災い転じて福となす」何がなくとも心豊かに、一日を大切に、感謝の心を忘れずに暮らしております。

御先祖様に見守られて

明石市 瀧野カジエ（七十二歳）

震災から十年、あつという間に過ぎ去ったような気がします。

あの時主人は、入院しており限られた余命でした。しかし、自分の体の事より家はどうなっているのか心配で、タクシーに乗って帰って来ました。

屋根の瓦は一枚も残らず全部落ち、家の中の家財道具はひっくり返り、みるかげもない有様にぼう然と立ちすくみ、何から手を付けたらいいのか分からない状態でしたので、主人はすぐに病院に戻りました。

二つの店も半壊、水道・電気・ガス・電話はとまったまま、真暗な中どうしたらよいのか分かりませんでした。

そのうち水道電気がつき、やっと人間らしい生活ができるようになりました。でもお風呂には何日も入れませんでした。何が不足でも体が元気でいられる事にまず感謝してがんばろうと心に誓いました。雨が降ると困るのでまず屋根のとたん板を張る事に一歩ふみだしました。子供達が生懸命がんばってくれたお陰で、屋根の修理ができた時は感無量でした。

その年の五月に主人が他界しましたが、五人の子供達と力を合わせてがんばりました。その子供達もそれぞれ新しい家庭を持ち、孫も次々と生まれました。

時を越え、自分に残された使命は何か？今日まで自分を育て守って下さった御先祖様の供養をさせて頂く事が、自分達の運を切り開く源であると思ひ、孫の幸せのためにひたすら精進する日々です。

子供の頃戦争体験も存分に味わい、震災にも遭い、主人を見送り、子供達も親はなれました。これからは、年老いても心は美しくかがやいてゆき、子供にほんとうに誇ってもらえる親になり、うれし泣きの出来る人生、笑いながら死ぬる人生でありたいと願っています。

私のモットーは思いやる心、あきらめぬ心、ためになる心です。



震災の経験が私の責任感を強くした

長田区 木下友紀（二十九歳）

私は現在、灘区の幼稚園の教諭をしています。今在園している子供は震災後に産まれた子供達ばかりです。

当時私は保育短期大学の一年生でした。控えていた幼稚園の実習園が全壊し廃園したり、東灘区にあった大学自体二カ月程休学状態になってしまいました。

その年の六月から行われた、長田区内のある保育園の実習では、地域の幼い子ども達を抱えるお母さん達の、不安な心境をとても身近に感じました。この震災を経験せずにそのまま保育者になっているよりも、大切な子どもの幼児期の発育に携わるといふ責任感は強くなったと思います。

これからも、震災を通して経験した事を忘れず、子ども達のため、精いっぱいこの仕事をしていきたいと思っています。

阪神電車撤去作業の現場

がくはやまにのぼるがごとし
學者如登山

すべて物学びする者は山に登ると同様で決して容易ではない

大変だったあの日

中央区 近藤喜代子（八十一歳）

神戸に育って水害こそよくあるので知っていましたが、地震なんてほんとにびっくりしました。

「二階のとびらを早くあけなさい。」と孫達に言っ、私もあわてて子犬をつれて外にでました。

私の家は山の方なので、なんとか家の被害は屋根と少しですみましたが、主人も息子も早く亡くなっていますので、女と子供だけでほんとうに大変でした。

浜の方のお家は、火事で水もなく、お日様のようにまっかで、大変でした。

東京の大震災がちょうど大正十二年でしたので、もう地震があるころと思っていたら、神戸でおきるとは本当に驚きました。

ちょうど厄神様の前の日に、亥年かなあ。

この十年、ほんとにあつという間でした。でも、

歩くしかないのどこまでもどこまでも歩きました。

本当に自然の力は大変です。



阪神電車撤去作業の現場

二度としたくない思い

垂水区 浅田正子（六十三歳）

前日の事、友達みんなで神戸という所は、大きな台風の被害もなく、地震などもないし、また海や山にかこまれて、ほんとうに住み良い町だと、喜んで話していた。

ところが、あくる日の事、大きなうねりとゆれにびっくりしてとび起きた。「地震や」と主人の大きな声で、びっくりして、何が起きたのかわからない。すると、あちらこちらから大きな物音、物の落ちる音、食器のわれる音、ガチャン、ガチャン。自分でもパニックになってしまっていた。とりあえずパジャマの上に着替えを一枚ひっかけコートも着ずに外へととび出した。あちこちの人達もとび出して来ている、寒さも忘れて。

こわさのほう先だった。その間も余震が続いている。目の前の石垣がぐらぐらゆれている。何かやわらかいものがゆれるみたい。今考えると「ぞおつ」とする。

遠くの方から黒いすすのようなものがふって来た。何だろうと言っていると、あちこち体やいろんな所に黒いものがつく。油煙がとんで来た事がわかった。みんなで心配していると、長田のほうで火災がおきているらしい。ほんとうにこわい事だと身もちぢむ思いをした。

主人は仕事上会社へ行かなくてはならない。一人で何日もするすばん。余りのこわさに、友達の家へとまりに行かせてもらった。迷惑だったと思う。でもとても親切にして頂き生きかえった思いがした。ありが

とう。何日もガス、水道が止まって大変だった。

余震は相変わらず続いている。

子供の所が早く水道やガスが出たので子供の家へとまりに行った。子供の家から仕事に通っていた。

家へ帰ってから水道、ガスが一カ月位止まっていた。毎日は水をこぼすのも大変。ほんとうにみんな大変だったなとつくづく思い出される。

もう二度とあんな思いはしたくない。



人は生かされている

兵庫区 谷田敦子（七十一歳）

元町で保育所を営んでいた。その時保育所には子供がいなかった。思わず合掌した。時間が時間だと子供達の誰かかと思うと……。一瞬の出来事にはウンもスンもない地震である。私はお陰で、頭の先も足もとにも家具のない場所に寝ていたので無傷で助かった。これもまた合掌！

家の中は滅茶苦茶である。思い浮かんだのは、母が言っていた「この世の物は借り物。みんなお借りしている。」という言葉である。自分の物、私の物と欲と一緒に生きてきた生活は、見事に壊れ、哀れなす

がたに……。悲しみも通り越し、自分の居場所、半径五十センチでもと、暗がりでも動く。

水・ガス・電気・これ等が来ないので生活できず、保育所も、もの見事に壊れていた。一時間かけて元町まで歩き荷物を整理したり、家に持ち帰ったりの生活。でも、家では生活出来ず大阪市の姉の家での生活が始まった。以降保育所の再開へと続く。一番困ったガスが七十五日目に通じた。水は三十日間位、マンションのタンクが壊れていたので修理も手間どった。あつちもこつちも……。その間大勢の人達のお力添えによって生きて来られた。幸い冬だったので、しばらく入浴しなくてもどうにかなる。どれだけ地震を責めても恨んでも致し方なし。我が身にふりかかった運命だと自分に言い聞かせて、前向きに生活することのみで、いろんな方達の事を思えば我が家で生活できる幸せを実感する。

あれ以降は、食器類は何にも買わずに頂き物で過ごし、出来る限り物を増やさずをモットーに生きている。でも心は豊かにと、近頃は生きているのでなく、生かされている事にありがたいと思う毎日である。

年をとって来ると自然ともつたいたい事に気付くものだ。何時来るか分からぬ自然災害に、常日頃から充分な心の準備は大切だが……。すぐに忘れてしまうものだ。



地震の瞬間に止まった時計

天災と人災

須磨区 後藤瑠璃子（六十八歳）

忘れようにも、忘れられないあの悪夢の日。神戸に地震なんか来るはずがないと勝手に思い込んでいた。でもそれがやって来たのです。家は全壊でした。何とか命だけは助かりました。疲れて一階の居間のこたつで寝ていたのですが、夜中に二階の入院中ではない義母のベッドにもぐり込み助かったのです。崩れた居間の惨状を見て、ここで朝まで寝ていたら、きっと今いなくなつたろうと思います。見えない所で誰かが守ってくれていたのだらうと感謝しています。一年余りで元の所に家を新築して帰って来ました。息子のお陰です。

息子も一階の別の部屋で動きが取れなく、近所の人々が二階の床をくり抜き、声を頼りに引き上げて下さったので、すり傷位で助かりました。

回りの大勢の方々に、勇気づけられ何とか乗り切る事ができました。壊れた家の解体の日は、東京で地下鉄サリンの事件が起きた日でした。ラジオを聞いていましたが、すぐには理解できませんでした。自分達は天災です。でもあれは人災です。何かこの先もっと大きな事件が起きるかも知れないと、とても不安にかられたものです。

ライフラインがストップし、通勤の足も取られ、たくさん歩きました。あれから、リュックとパンツが流行したように思います。今は退職し余暇を楽しみ、母の介護も少々やりながら平和な日々を送っています。

す。
助けてもらった命です。少しでも人の役に立てたらと、できる事は精いっぱいやっています。神戸の町も復興に向けて、だんだんと生き返ってきているように感じます。
二度とあのような災害が起きないように、明るく、平和な住み良い町であり続けますようにと祈りつつ筆を置きます。

家族の絆

須磨区 K・N (五十歳代)

平成七年一月十七日午前五時四十六分。「ゴォー」という地鳴りのようなものすごい音とともに、誰かに揺さぶられ、下から突き上げられるような激しい揺れで目を覚ました。

とつさに、隣に寝ていた長男を引きずるように玄関のほうまで行き、階段の下から上に向かって「大丈夫？」と声をかけると、「お母さん、大丈夫？」と二階から聞こえてきた。わたしと長男は一階、二人の娘と体の不自由な夫は二階で寝ていた。家族の顔を見て、はやく無事を確かめたいと思ったが、激しい余震が続き、思うように体が動かない。

玄関は、下駄箱から飛び出した靴や傘が散乱し、電話はいつもの場所から二メートルぐらい飛んでいて、足の踏み場もない状態だった。
いったい何が起こったのだろう……。家は、神戸はどうなっているのだろう……。まるで、想像がつかなかった。
余震が少し治まり、二階にいた二人の娘と夫もおりてきて、家族全員の顔を見ると、ほっと安心した。と同時に、ものすごい恐怖を感じた。電気もガスも止まり、寒さと恐怖で震えている子供たちと体を寄せ合って、夜が明けるのを待った。

昨日は長女の成人式。いろんなことがあったけれど、立派に成長した姿をみて、親としてこの上ない喜びに満ちていた。なんと幸せなのだろうと思いつつ眠りについた昨日が、遠い昔のように思えてくる。
夜が明け、外に出て、近所の人たちと無事を喜び合った。目にしたのは、破裂した水道管から噴水のように噴き上がる水と、不気味に赤い空の色だった。

しばらくしてから、電気が復旧し、テレビで目にしたのは崩壊してしまった街の様子だった。我が家から、五キロメートルぐらいしか離れていないところで、家が崩れ、燃えていた。この先、どう生きていけば……。目の前の現実を理解できず呆然と、まるで他人事のように、テレビを見ていた。

三人の子供と、体の不自由な夫を抱え、またあの激しい揺れがきたらと思うと、どうしていいのかわからず不安でたまらなかった。余震は治まらず、たまに激しく揺れる。テレビの、崩れて燃えていた家の映像と重なり、子供たちの恐怖と疲労はピークだった。そこで、親戚の家に避難することにし、車で迎えに来てもらうことにした。普段なら、四十分くらいで来るのだが、地震で道が悪く、混乱していたため、六時間かかりやっと車が到着した。その間子供たちは、悲壮な顔で荷物を抱え、ずっと玄関で待っていた。

一週間たつて家に戻った。余震も治まり、街は少しづつ落ち着きを取り戻していたが、水道の復旧が遅れていて、いつもどおりの生活とまではいかなかったし、三人の子供と体の不自由な夫を残して仕事に出るのは不安だった。そんな時、友達や近所の人たちが銭湯に連れて行ってくれたり、時々家の様子を見に来てくれたりと、私たちを支えてくれた。

つらいこともたくさんあったが、多くの人に支えられ、家族全員が力をあわせ、いろんなことを乗り越えてきた。失ったものも多くあったが、家族の絆、人のやさしさや温かさなど、得るものも多かったと思う。みんな、どんなにつらくてもがんばろうという気持ちを忘れずに、支えあつて生きてきた。これから、その気持ちを忘れずに、生きていきたいと思う。

春の兆しに

垂水区 弓削幸江（六十七歳）

年輪を重ねて強い絆もつ

ちりぢりの友の声聞く昼さがり語りつきない年月拾う
今は冬怒とうのごとく生き生きて春の兆しに星も舞いとぶ

菅原商店街は今

長田区 太田信一（八十歳）

昼さがり、誰も通っていない。話し声もない。死んだような静けさ、空しい。機械油で汚れた作業服で食後のブラブラ歩きをしていた若者。年配の人達。近くのゴム工場のパートのおばさん達が、エプロン姿で夕食の買物等しながら、賑やかに話の花をさかせていた。みんなどこへ行ったのかなあ。

長田は、震災の時、火災の発生率が一番高く、いたましい焼死者も多かった。無惨な悲しい話もいろいろ聞いた。菅原は特に。

十年たった今、鉄工所もゴム工場も商店も景気は低調、震災後の借入金もなかなか返済できない。後継者の問題、高齢化等々あつて閉業した所も多々あるらしい。

街は、真新しい家屋が大分建ち並ぶようになったけれど、早くあの活気が戻って、下町のたくましい生活が甦って欲しい。

今は老兵は消え行くのみの境遇ではあるけれど、ただただ祈るのみ。



吾唯知足

(われただたるをしる)

直後の状況

震災一週間後、中央区栄町に住んでいた私の弟家族五人が、我が家の風呂に入りに来た。「一週間ぶりに命の洗濯をした。」と言って、家族全員の無事を喜び合った。

当時私達夫婦は、三木市に住んでおり、毎日地元の公民館へ被災者の「おにぎり」を作りに行った。各家庭から、毛布、歯ぶらし、タオル等すべて予備品を救援に出した。

半月後、弟の家族へ自宅で炊いた「山菜おこわ」を持って行った。その時JRは兵庫駅まで復旧。駅ホームの長蛇の列の人に驚いた。トイレの順番待ちの列という悲惨な状況だ。JR兵庫駅から弟のマンションまで歩く。電気、ガス、水も止まり、エレベーターも使えず、階段を八階までのぼった。

あの当時大勢の人はみな、手には軍手、マスク、防寒頭きん、背にはリュックを背負って、三宮中心、ハーバーランド、ポートタワー等、粉塵の舞い上る中をただ無言のまま歩いていった。



三木市 吉田三千代（六十九歳）

電話の向こうから

須磨区 辻 重子（六十六歳）

震災後やっとながった電話、その時電話の向こうで、「助かったの、助かったの、よかったよかった。命があればこれから楽しい事がある。頑張れ。」と言われた言葉、いつになっても忘れる事はできない。あの時の一言で元気づけられた。

あの日から十年、地震の時、はじめは近くに飛行機が墜落したのかなと思った瞬間横ゆれになりおさまるまでの長かったこと。外に飛び出し明るくなるにつれてあたりが見えてきた。様子がすっかりかわり合っている。ただぼう然と立ちすくんだ。

一年後に、もとの場所に家を再建し帰って来る事ができほつとした。街並みはだいぶ変わったが、近所にすんでいる人達はあまり変わりなく、夕方になると井戸端会議が出来る。それも楽しみの一つ。あの時電話で勇気づけられた言葉は私の心にも残っていくだろう。

安
不
忘
危

あんにしてきをわすれず
安 不 忘 危

安全にして尚お且つ危き場合のことを忘れない

星空

西宮市 水谷公美（三十二歳）

星空がこんなにきれいにつぶやいた途端に流れた涙にとまどう

震災から四カ月ほどした頃でしょうか。片道三時間（そのうち二時間は歩き）の通勤時間と、水道とガスのない生活に我慢に我慢を重ねて、くたくただった時がありました。夜、帰宅途中に「疲れたなあ」と思つて、ふと夜空を見ると、星が一面に広がつて、とつてもきれいでした。「星がこんなにきれいだつたこと、忘れていた」と思つた途端に、涙があふれ出て止まりませんでした。今振り返ると、この時から自律神経失調症の症状が出てきました。

友達と見知らぬ人のやさしさにありがとねをもう一度

一人暮らしをしていた私は、被災直後からその年の十月に日本を出国するまで、友達だけではなく、見知らぬ人にもいろいろ助けてもらいました。あの時、みんなからの助けなしでは、今の私はなかったと確信しています。もう一度、みんなに心の底から「ありがと」と言いたいと思います。

あの頃のつらさにまさるものなしと今は思わぬ異国での生活

被災後のつらさ以上のものはないから、ニュージーランドで何があつてもつらくないと思つて日本を出ましたが、異国での生活は、それはそれでまた別のつらさがありました。人種差別だけでなく、孤立感、英語で対話できないもどかしさ、文化摩擦など、違ったタイプのつらさがあり、引き続き、自律神経失調症に悩まされることになりました。



震災の余波

須磨区 匿名（五十歳代）

大地震のとき、私の自宅はほとんど被害はありませんでした。けれど、夫の妹宅が、長田区で全壊しました。そのため、直後四、五日は毎日、妹宅用の食事や着替えを持って長田へ通いました。妹宅では、盗難と火事を恐れ、家から離れることもできず、車庫を利用して生活していました。

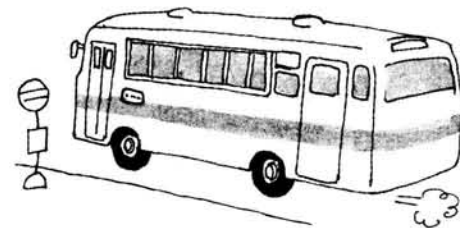
その後、妹は被害のなかった親の家に転居しました。私の家の家族も総動員で家財道具の運びだしやら、引っ越しやらの手伝いをしました。

知り合いで避難している人のために延べ百人程に、我家のお風呂に入っていたいただきました。自宅に被害がなかったことが、被災者に対してなんだか申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

我が家が地震の被害者になったのは、地震から十カ月たった年末でした。夫の会社がとうとう業務を停止することになったのです。夫の会社は中堅の貿易会社でした。地震で神戸港の仕事がストップしている間に、貿易業務が大阪に移ったことが主な原因だったと聞きました。数人の部下の再就職はどうにか確保できたものの、夫の就職先は神戸にはもう残っていませんでした。この時、我が家も被災者になった訳です。

当時、子供は高校三年生と中学三年生でした。二人とも進学予定だったのですが、父親が失職したことをしばらく知らせませんでした。母親の私は、パートを二つかけもちで働きました。幸い、すぐに夫も再就職（給料は半分以下になりました）できましたが、あの時の心細さは忘れられません。子供は二人とも奨学金制度を利用し、大学を卒業し、就職しました。二人とも、経済的に早く自立しようと努力したようです。

あれから十年。おだやかな毎日が、とてもありがたく感じられます。



一からの出発

西宮市 M・K（六十歳代）

目覚めた時、一瞬何が起こったのか分からなかった。見ると家具が折り重なって倒れ、重い衝立が私の枕ぎりぎりに倒れている。あと数センチ位置がずれていれば、私は即死だっただろう。

私は一階に、家族は二階に寝ていた。階段は大きく傾いている。各部屋は家具が倒れ戸口が塞がれ出る事もできない。何とかして部屋から出たが、今度は玄関も勝手口も変形し戸が開かない。仕方なく縁側の窓を打ち破り外に出た。外には毛布を抱えた人々がゾロゾロとうつろな目でただ黙々と学校に向かって歩いていた。まるで魂を抜き取られたかのように。誰かが叫んだ。「食料を確保しなければ。」「自動販売機は使えるのか。」

体育館には既に人々はあちこちに毛布を敷き、それぞれ放心したように座っていた。私は早く職場に休願いの電話をしなければと、その事がぐるぐる頭の中を回っていた。公衆電話を捜すとそこはもう長蛇の列、皆イライラしながらまっていた。電話をすると「どうしたのですか」との応答。奇妙な感じがした後で分かった事だが、大阪方面は被害が少なかったらしい。

二日間体育館に居た。ボランティアの人達からおむすびが配られた。先に子供達やお年寄りに。皆が相手の事を思いやり、いたわり合う。弱い立場の人達に常に気配りを怠らない。献身的に尽くして下さったボランティアの方達。自分の家が大きな被害を受けているにもかかわらず、いろいろ奔走して下さった関

係者の方々。何時間も歩き見舞に来て下さった親類、知人。人々の沢山の優しさにふれた。人間って何て素晴らしいんだらうと、胸が熱くなり涙がこぼれた。

私は一週間職場を休んだ。勤務途中西宮北口駅はジャンパーにズボン、大きなリュックを背負った人々でごった返していた。ところが大阪方面へ行くと、まるで何事も無かったように華やかな服装で歩いている。不思議な感じがした。

家は全壊と認定された。傾いた家の中から、少しずつ大切な物を取り出し倉庫に運び込んだ。家を解体する日がやって来た。夫は子供の頃から住んでいたので涙が止まらなかったと言ひ、この場所にまた建てようと言った。私は、悲惨な思い出のこの場所から離れたかった。(近くでは家の下敷きになり亡くなられた人もいた。)

くたくたに疲れ果てた私は、三十五年間勤めた職場を定年まであと五年を残し退職した。退職後、ストレスと過労で一カ月間入院した。震災の年十二月に神戸北部に移って来た。新しく授けられた命と思ひ一からの出発だと思つた。

今こうして振り返ると、あの体育館でお互い支え合い、励まし合い、皆の気持ちが一つになったあの熱い思いは忘れることができない。沢山の人々の優しさに触れた。感謝の気持ちでいっぱいである。

今なお震災の後遺症に苦しんでいる人が大勢おられる。どのように解決していけば良いのか、行政も含め大きな課題だと思ふ。

